

エンディングノート

染谷 秀雄

このところつぎつぎに会員の逝去がつづいていく。「秀」は季刊のため発行のたびに誰かが亡くなり会員の特集を組むことになってしまっている。今回は三人にもなってしまった。長年おつきあいをしてきた人が亡くなることは本当に寂しくなってくる。人の命には限りがあることは承知しているが、高齢化のためか、最近はそれが顕著である。年も改まりこの頃、自分もその年齢に近づいてきているせいか自分ではまだまだだと思っても家では死後のための財産関係の在処というか、金融機関の口座はどれか、大して無いがそれでも万が一のために預金通帳の場所、印鑑の種類など何かどこにあるのかを明確にすることを□を酸っぱく言われる。確かに人の命はいつどうなるかは誰にも判らない。通勤路上で、交通事故で死に至らないまでも意思疎通が困難な事態にならないとも限らない。銀行でも簡単に死後本人以外の預金引き出しは直ぐには難しいと聞く。そうならないためにも家族が困らないようにしておくことは世帯主の責任として強く感じている。ところがそれをきちんと書き出しておかなくてはいけないことは解ってはいるか、まだ大丈夫だと思ふと、それをやるのが後回しになって、ずるずるとなってしまうている。借金はないものの、かといって財産も大してはないが、家屋の不動産権利証等もひとつにまとめておかなければならない。勤めていた会社の金庫株も現在は価値が十分の一になってしまっても何十年後の将来、会社が盛り返してくるかもしれないと思うと資産株を処分せずそのままにして子供のために取ってある。そのようなことを年が改まって会員の逝去を目の当たりにして強く感じている。